

オンラインによる短期日本語プログラムの授業実践

Practice of Online Short-term Intensive Japanese Program

藤田恵・金庭久美子・丸山千歌
FUJITA Megumi, KANENIWA Kumiko, MARUYAMA Chika

〔要旨〕

本稿はオンラインによる短期日本語プログラム（以下、短プロ）の実践報告である。新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、これまで対面で実施していた短プロは、2021年度に初めてオンラインで展開することとなった。オンライン短プロの展開にあっては、短プロ開始当初から掲げている「留学生にも日本人学生にも有意義な国際化」への貢献を軸にして、さまざまな取り組みを行った。コースデザイン上、特に検討が行われたのは、「授業活動」、「学生ボランティアとの活動」、「成果発表」の3点である。本稿では、この3点に焦点を当て、オンライン短プロにおいて、どのような取り組みによりプログラムを展開したのかを示す。

Key word: 短期日本語プログラム、オンライン授業、学生ボランティア、大学の国際化



1. はじめに

立教大学短期日本語プログラム（以下、短プロ）は、本学の国際化推進機構と日本語教育センター（以下、CJLE）が共同で運営しているプログラムで¹⁾、CJLEは企画と運営を担当し、教務面でコースデザイン、コース運営を担っている。

短プロは、2016年度の試行を経て、2017年度より本格実施となり、2018年度にはシドニー大学の団体受け入れの開始、2019年度には実施回数を増やして年3回実施となり、海外の大学から120名の留学生が参加した。しかし、2020年度は、新型コロナウイルス（以下、COVID-19）の感染拡大の影響を受け、予定していたすべての回の短プロが中止となった。

これを受け、今後COVID-19のような不測の事態が起きた場合でも、本学の教育交流が継続可能なプログラムを開発するために、オンライン版短プロの可能性や課題を探ることを念頭に置いて、2021年度に初めてオンラインによる短プロを計画した。具体的には、後述のとおり、1つは日本語クラスのための短期間のプログラム、もう1つは対面時と同様の日本文化社会講義を組み込んだプログラムである。

このような考えにもとづいたプログラムの短プロの試行は、本学の短プロの充実、発展のみならず、コロナ禍、アフターコロナの時代においても、学内の国際化を支える多くの教育機関において、示唆を与えようとする。

そこで、本稿では、2021年度の夏期に2回実施したオンラインによる短プロの授業実践を報告する。短プロは、当初より「留学生にも日本人学生にも有意義な国際化」への寄与を目標として掲げているところだが（立教大学日本語教育センター、2018）、オンラインによる短プロにおいて、この目標の実現のためにどのような取り組みをしたかを報告する。

2. 短期日本語プログラムの対面版とオンライン版の異同

オンライン短プロの開発は、通常授業時の対面時とオンライン時の実施条件、授業活動の異同と、短プロだからこそ対面時とオンライン時の実施条件、授業活動の異同を整理する必要がある。

通常学期に想定する日本語科目履修生は、学部や全学共通カリキュラムが展開する科目を履修することが想定されるので、本学に留学するかどうかの判断は、全学の活動方針に、学生自身が賛同できるかどうかで決まる。そのため、CJLEの日本語科目は表1、2にある授業環境や授業活動について検討しながら、オンライン時の授業運営の工夫を行う。

表 1 通常授業時の授業環境の比較

	対面授業	オンライン授業
場所	教室	オンライン会議システム (Zoom、Meet)
教室の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・コの字型 ・前向き型 	<ul style="list-style-type: none"> ・可能な限りカメラオン ・学生の都合によりカメラオフ
教室活動	教室での全体活動	メインルームでの全体活動
	席移動によるペア、グループワーク	ブレイクアウトルームによるペア、グループワーク
	教師の巡回指導【易】	教師の巡回指導【難】
	録音の利用 (IC レコーダー等)	録音の利用 (Zoom、Meet の機能)【多】
	録画の利用 (ビデオカメラ等)	録画の利用 (Zoom、Meet の機能)【多】
教師の質問に対する応答	口頭による応答 個別【易】 一斉【易】	口頭による応答 個別【易】 一斉【難】
	紙面への記述	チャット欄、Google フォームへの入力
授業中の教材提示、板書	OHC やスライドのスクリーンへの投影	教師の PC 画面の共有
	黒板、ホワイトボードへの板書	<ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボード機能、タブレット PC への手書き入力 ・Word、PPT のノート欄、チャット欄等への文字入力

(藤田他 (2021:7) を再掲)

表 2 通常授業時の授業活動の比較

	対面授業	オンライン授業
教材	紙面の配付	電子ファイル (PDF) の配付
	<ul style="list-style-type: none"> ・オリジナル教材 ・市販教材 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリジナル教材 ・新規開発のオリジナル教材
	web 上の日本語教材、生教材 (ニュース等)【少】	web 上の日本語教材、生教材 (ニュース等)【多】
宿題	学生の解答	
	<ul style="list-style-type: none"> ・紙面の宿題シートへの手書き【多】 ・電子ファイル (Word 等) への文字入力【少】 	<ul style="list-style-type: none"> ・別ファイル (Word 等) への文字入力 ・ノートへの手書き (写真を送付) ・PDF ファイルの宿題シートへの文字入力、タッチペン書き込み ・Bb への入力
	回収、返却	
	<ul style="list-style-type: none"> ・教室での紙面の回収と返却【多】 ・Bb、メールでの電子ファイルの回収と返却【少】 	Bb、メール、チャット欄での電子ファイルの回収と返却
	フィードバック	
<ul style="list-style-type: none"> ・紙面への手書き ・電子ファイル (Word 等) への文字入力 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子ファイル (Word、PDF 等) への文字入力、タッチペン書き込み ・電子ファイル (PDF 等) を出力したものの手書き→再 PDF 化 	

クイズ	学生の解答、回収	
	・紙面のクイズシートへの手書き ・紙面の回収	・Bbによるオンラインクイズ ・画面共有での出題→チャット欄、Googleフォーム、電子ファイルへの解答の文字入力
	採点、返却	
	紙面への手書き→返却	・Bbによる自動採点→Bb上での解答と点数の確認 ・電子ファイルへの採点→返却
筆記テスト	テキスト類、辞書の閲覧	
	閲覧不可	閲覧可
	学生の解答	
	紙面の解答用紙への手書き	・Bbによるオンラインテスト（選択式、文字入力） ・GoogleドライブのPDFファイル（ダウンロード不可）の共有→別ファイル（Word等）への解答、ノートへの手書きによる解答（写真を提出）
会話テスト	教室での実施	・ブレイクアウトルームでの実施 ・個別の時間設定→メインルームでの実施
学生ボランティアの参加	対面授業時と比較してオンライン授業では、応募者数、及び実施回数が増加	
学生の出席状況	対面授業時と比較してオンライン授業では、遅刻と欠席が減少	

(藤田他(2021:8)を再掲)

これに加え、短プロは、学生が、短期の留学先として本プログラムを選ぶかどうかから検討する必要がある。このときに考慮すべきなのは、主に時差への配慮、単位数（＝日数と授業時間数）、科目の種類で、そのほか、日本語レベル判定、使用教材、成果発表などがあつた。

そこで、次節に示すとおり、2021年度のオンライン短プロは2つのパターンを試行して、オンライン短プロへの留学生のニーズを探ることとした。

3. 短期日本語プログラムの実施概要

2021年度の短プロは、夏期2回（2021年7月）、冬期1回（2022年1月）のオンライン実施が決定している。これまでの対面実施からオンライン実施への展開を実現するため、CJLEでは、2020年度より検討を進めてきた。表3に、2019年度までの対面実施、2021年度夏期、冬期のオンライン実施の短プロの概要を示す。

表3 短期プログラムの実施概要

	2019年度まで ²⁾	2021年度夏期 (2回実施)	2021年度冬期 (予定)
授業形式	対面	オンライン	オンライン
期間	約3週間	約1週間	約3週間
科目展開	①日本語 ②日本文化社会講義	①日本語・成果発表	①日本語 ②日本文化社会講義
授業回数	①50分×56回 ②50分×30回	①50分×28回 成果発表50分×4回	①50分×56回 ②50分×30回
単位数	①2単位 ②2単位	①1単位	①2単位 ②2単位
開講前の 日本語レベル判定	・インタビューテスト ・漢字、語彙、文法、作文 テスト	・インタビューテスト	・インタビューテスト
日本語科目の教材	・テキスト本冊 ・プリント教材	・テキスト e-book 版 ・電子ファイル教材	・テキスト e-book 版 ・電子ファイル教材
最終日の 成果発表	・PPTスライドを用いた発表 ・質疑応答、ディスカッション	・写真を見せながらの発表 ・質疑応答、ディスカッション	・PPTスライド、もしくは 写真を見せながらの発表 ・質疑応答、ディスカッション

2019年度の短プロは、対面で3回(7月、12月、1月)実施し、7月は67名、12月は21名、1月は32名、合計120名が参加した。期間は約3週間であり、「①日本語科目」と「②日本文化社会講義」の2科目展開であった。①では、開講前に、インタビューテストと、4科目のテストを実施して日本語能力の判定を行い、レベル別の日本語教育を行った。クラス体制は、参加者数に合わせて、その都度柔軟に対応しており、最小で2レベル2クラス体制、最大で3レベル5クラス体制で進めた。教材は、市販の日本語テキスト本冊と、オリジナルのプリント教材を配付し、使用した。②では、本学の学部教員の協力を得て、期間中に3つのテーマを取り上げ、学部教員の専門分野に沿ってデザインされた講義が行われた。最終日の成果発表は、まとめの活動として位置づけ、①で学んだ日本語表現を用いて、②の講義内容から考察したことを、Power Pointのスライドに示して発表を行った。(藤田他、2020)

2021年度夏期の短プロは、オンラインで7月に2回実施しており、1回目は3名、2回目は20名が参加した。期間は約1週間で、①の日本語科目のみを展開した。夏期1回目は、1レベル1クラス体制で進めた。3名のうち、2名は日本語を初めて学習する者、1名は初級の基本語彙と文法を少し学習した経験のある者であったため、既習学生には、日本語のレベルに合わせた追加教材を配付して個別対応を行い、学生ボランティアの協力を得て日本語による活動が多く経験できるように進めた。夏期2回目は、開講前のインタビューテストによってレベル判定を行い、2レベル2クラス体制で、レベル別の日本語教育を行った。教材は、対面時に使用していた市販テキストのe-book版と、PDFやMS-Wordなどの電子ファイルにしたオリジナル教材を使用した。

最終日の成果発表は、①で学習した日本語表現を用いて、写真を見せながら発表を行った。

2021年度冬期の短プロは、2021年12月現在、オンラインで1月に実施、5名が参加予定で、①と②の2科目を展開する。夏期の短プロが①のみの約1週間のプログラムであったのに対し、冬期は約3週間で2科目展開となり、対面時と同様のコース内容をオンラインで実施する。

前述したとおり、短プロのオンライン実施を実現するために、CJLEでは2020年度より検討を進めてきた。CJLE展開科目におけるオンライン授業の実施は、2020年度の春学期から始まっており、その知見が蓄積されている(藤田他、2021)。短プロのオンライン実施に向けては、これらを参考にしつつ、通常学期とは異なる短期間でのコースにおいて、どのように短プロの目標が達成できるかの検討が必要であった。その過程において、教務コーディネーターが特に検討を重ねたのは、日本語科目の授業活動、学生ボランティアとの活動、成果発表の3点である。次節より、この3つに焦点を当て、2021年度7月のオンライン短プロの授業実践を報告する。

4. オンライン短期日本語プログラムにおける授業実践

4.1 授業活動

短プロの日本語科目における授業活動は、これまでの短プロの授業実践と、2020年度より開始しているCJLE展開科目のオンライン授業での知見をもとに進めた。

短プロの参加者は、これまでの短プロと同様に本学の学籍と学生用アカウントが付与される。2021年度夏期の短プロの参加者は、海外からのオンライン受講のため、キャンパス施設の利用は叶わなかったが、本学がオンライン上で提供しているサービスや、LMSの利用は可能であった。そこで、オンライン短プロの授業活動では、図書館のWebサイトのサービス、本学学生用のGoogleツールなどを活用することとした。

主教材として用いたのは、対面時にも使用している市販テキストのe-book版である。短プロ参加者は、学生アカウントにログインすることにより、図書館のWebサイトから、テキストの閲覧とページの一部をダウンロードすることが可能である。授業では、このテキストを使用して、文法項目の導入、聴解練習、会話練習、ミニ発表などの発展的な活動を行った。また、副教材として、学習項目の定着を図るための宿題シートや理解度を測るためのクイズシートを、電子データにして使用した。これらも学生用アカウントで利用可能となるツールを活用し、Google drive、Google form、eメール、Zoomのチャット機能から、配付したり、提出させたりした。

短プロの日本語科目は、参加者数とコース運営の事情により、通常学期のCJLE展開科目よりもレベルの展開数が少なくなるため、クラス内の日本語レベルの差が、やや広くなる傾向がある。2021年夏期2回のオンライン短プロにおいても、参加者の事前提出資料によって示された日本語学習歴より、同様の傾向が表れることが想定されたため、一部の日本語レベルが高い学生に対し、追加教材の配付と個別対応を行うことを、短プロ開講前に決定した。短プロの日本語科目における個別対応は、これまでも行っており、教室の中で座席配置の工夫と机間巡視をすること

により、一人の教師が教室全体への指導と、個別対応を並行して行うようにしていた。しかし、オンライン短プロにおいては、同様の方法をとることが困難であり、どの学生に対しても学習の機会と質を保ちつつ、満足度の高い方法でレベル差対応をするには、どのようにすればよいのかを検討する必要があった。検討の結果、オンライン短プロにおいては、学生ボランティアとの活動を多く取り入れるようにし、参加者の日本語レベルの差に柔軟に対応できるようにコースをデザインした。

4.2 学生ボランティアとの活動

1節で述べたとおり、短プロは開始当初より「留学生にも日本人学生にも有意義な国際化」への実現に貢献することを目標として掲げており、その一端として、短プロ参加者と学生ボランティア（本学学部生、大学院生）が共に行う活動を多く取り入れている。これまでの短プロにおいて、学生ボランティアは、日本語科目では、会話練習、ロールプレイの相手役、ミニ発表の聞き役、日本文化社会講義では、講義内容に関するディスカッション、フィールドトリップの引率補助、コースのまとめの活動である成果発表では、発表準備の補助、発表内容に関するディスカッションなどの活動に参加してきた。また、短プロ参加者と学生ボランティアとの交流は、授業内の活動のみでなく、週末のサークル活動の体験、お昼休みのグローバルラウンジ主催のイベント、放課後のCJLE主催のイベントといった課外活動においても、その機会が多くあった。

2021年度夏期2回のオンライン短プロは、約1週間の日本語科目のみのコースであったが、これまでと同様に短プロの目標を達成するため、学生ボランティアとの活動を積極的に取り入れるようにした。特に、日本語科目における学生ボランティアの参加回数を大幅に増加し、1クラス体制であった夏期1回目には30回、延べ42名、2クラス体制であった夏期2回目には26回、延べ74名の学生ボランティアが参加した。

学生ボランティアには、これまでのように短プロ参加者の日本語学習の練習相手や課題作成の補助をお願いしたが、事前に課題として挙げられていたレベル差対応において、教師が助けられる場面も多かった。レベル差対応の一例として、文法項目の導入を教室全体に行った後、文作成や会話練習の教材に差をつけ、レベルによって異なる授業内課題の作成を課すことがあった。その際、Zoomのブレイクアウトセッション機能を用いて、短プロ参加者と学生ボランティアの小さいグループを作り、そのグループを教師がこまめに移動することにより、各レベルに合わせた指導とフィードバックを、別の課題に取り組むクラスメートの気を散らすことなく行うことができた。他にも、クラス全体への指導の後、レベルが低めの学生には発展練習を課し、レベルが高めの学生には、別教材を用いて、より高いレベルの新規項目の導入と練習をすることがあったが、発展練習の相手を学生ボランティアにお願いし、新規項目の導入と練習を教師が行うということも可能であった。

オンライン短プロの日本語科目において、学生ボランティアとの活動を多く取り入れたことは、短プロ参加者に対するレベル差への対応が細やかにできただけでなく、学生ボランティアにとっ

でも学びを得る機会となっていたようである。学生ボランティアに対するアンケートについては、5節の学生ボランティアからみた短期日本語プログラムの評価で報告する。

4.3 成果発表

短プロでは、コース最終日にまとめの活動として成果発表を行っている。形式は Power Point を使用した発表であり、日本文化社会講義で学んだ内容から考察したことを、日本語科目で学習した表現と、部分的に英語を用いて発表する（藤田他、2020）。成果発表の形式と指導内容については、これまで検討と改善を重ね（表4）、日本語レベル別の指導モデルの設計を行った（図1）。

表4 成果発表指導への取り組み

年度	指導内容・改善点	課題
2017年度	<ul style="list-style-type: none"> 発表の構成を示す 発表の表現を指導する 発表後に質疑応答を行う 発表会を合同で行う 	<ul style="list-style-type: none"> △レベル差があり、発表の構成を示してもできない △発表内容と日本語のレベルが合わない。 △聞き手の学生に内容が伝わらない
2018年度	<ul style="list-style-type: none"> レベル別に発表の構成を示す 使用言語の割合を考慮する 発表の表現を指導する 発表後に質疑応答を行う 発表会をクラス別で行う 	<ul style="list-style-type: none"> △質疑応答でよい質問が出ない
2019年度夏期	<ul style="list-style-type: none"> レベル別に発表の構成を示す 使用言語の割合を考慮する 発表の表現を指導する 発表後に発表者から問いかけを行い、ディスカッションを行う。 発表会をクラス別で行う 	<ul style="list-style-type: none"> △発表の準備時間が足りない
2019年度秋期	<ul style="list-style-type: none"> レベル別に発表の構成を示す 使用言語の割合を考慮する 発表の表現を指導する 発表後に発表者から問いかけを行い、ディスカッションを行う 発表会をクラス別で行う 	<ul style="list-style-type: none"> △指導方法の検討と改善についても教師間で積極的に話し合う必要がある

（藤田他（2020:104）を再掲）

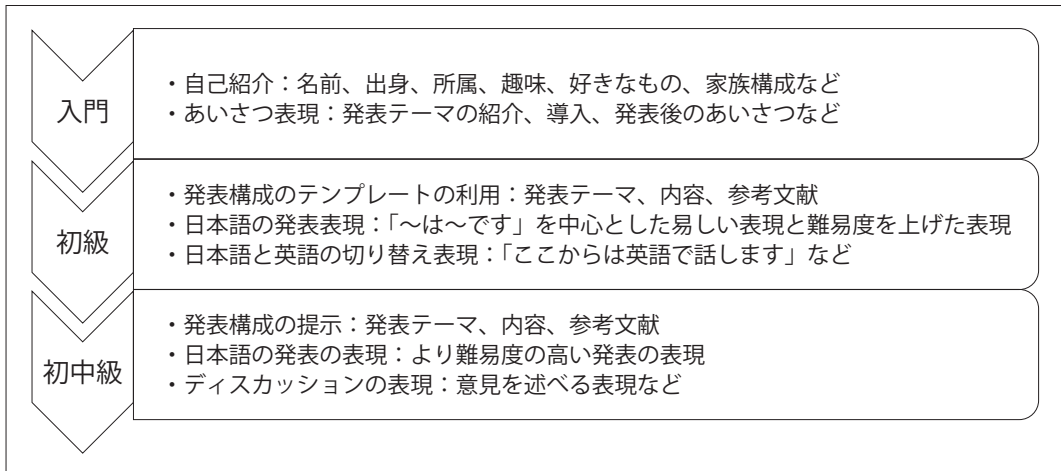


図1 成果発表のレベル段階別の指導モデル（藤田他（2020:107）を再掲）

2021年度夏期のオンライン短プロの展開にあたって、成果発表の形式と指導内容について、再検討を行った。まず、2021年度夏期のオンライン短プロは、日本語科目のみの展開であったため、発表内容は日本語科目で扱ったトピックに関するものとした。次に、この内容の発表が行えるように、発表テーマの候補、発表の文例、発表の構成を示したレベル別の教材を新たに開発した。さらに、発表形式の検討も行い、写真を見せながらの発表とした。Power Pointを使用した発表からこの形式に変更したのは、スライド作成に要する日本語表現の指導時間を授業時間内に十分に確保することが困難であったためである。そして、レベル差のやや大きいクラス構成の中で、聞き手であるクラスメートが発表内容の理解を深めるためには、視覚資料を示すことが有効であると考え、発表内容に合った写真を見せるようにした。指導内容については、図1のモデルに沿った指導がオンライン授業においても実現可能であると判断し、教師は短プロ参加者の日本語レベルに合った指導を取り入れるようにした。

このような設計で、成果発表の準備を進め、発表を行った結果、発表者は自身の日本語レベルに合った発表を行うことができ、発表後の質疑応答とディスカッションが活発に行われたことから、聞き手のクラスメートに発表内容が十分に伝わっていたことが確認できた。

1月に実施する2021年度冬期のオンライン短プロは、日本語科目と日本文化社会講義の2科目展開となるため、現在、成果発表の再設計と教材開発を進めているところである。発表の内容は、コースのまとめの活動となるように、2019年度の進行方法を採用し、発表形式は、短プロ参加者の日本語レベルと受講の様子を見ながら、最終的な決定をする予定である。冬期のオンライン短プロにおいても、この発表が学習成果を十分に発揮できる場となるように、準備を進めていきたい。

5. 学生ボランティアからみた短期日本語プログラムの評価

本節では、学生ボランティアからみた短期日本語プログラムの評価について報告する。

2021年度夏期2回の短プロは、オンラインであるため、日本語の活動を増やすことを重視し、学生ボランティア募集に力を入れ、多くの本学の学部生、大学院生に声をかけた。その結果、約1週間のコースで、ほぼ毎日学生ボランティアの協力を得て、授業を行うことができた。

2021年度夏期2回のオンライン短プロの学生ボランティアの参加状況は表5の通りである。

表5 オンライン短プロの学生ボランティアの参加状況

	夏期1回目	夏期2回目
クラス展開数	1クラス	2クラス
短プロ参加者数	3名	20名
学生ボランティアの 授業参加回数 (1コマ100分) ³⁾	15コマ (全16コマ中)	Aクラス 6コマ Bクラス 7コマ (全16コマ中)
学生ボランティアの参加者数	延べ 42名 異なり 22名	延べ 74名 異なり 29名
1コマ当たりの 学生ボランティアの参加者数	2.8名 (42名/15コマ)	5.7名 (74名/13コマ)
アンケート回答者数	14名/22名中	15名/29名中
アンケート回収率	63.6%	51.7%

夏期1回目のオンライン短プロでは、延べ42名、異なり22名の学生ボランティアが参加した。1コマ100分あたりの参加者数は2.8名であり、短プロ参加者が3名だったことから、短プロ参加者と学生ボランティアが1対1の日本語での活動が可能となった。夏期2回目のオンライン短プロでは、延べ74名、異なり29名の学生ボランティアが参加した。1コマ100分あたりの参加者数は5.7名であった。この数字からわかるように、夏期1回目、夏期2回目ともに多くの学生ボランティアが参加し、短プロ参加者と交流したことがわかる。

学生ボランティアに対し、コース終了時にアンケートを実施した。夏期1回目は、学生ボランティア22名のうち14名がアンケートに回答し、夏期2回目は、学生ボランティア29名のうち15名がアンケートに回答した。

アンケートの質問事項は資料1の通りである。

資料1 2021年度夏期1及び夏期2の学生ボランティアに対するアンケートの質問事項

1. 授業ボランティアとして参加してよかったと思いますか。
2. なぜそう思ったのか、その理由を書いてください。
3. クラスに入る前に、この授業ボランティアでどのようなことを期待して、この授業ボランティアに参加しましたか。
4. 期待していたことが達成できましたか。
5. 期待していたこと以外に、気づいたり学んだりできたことがありましたか。
6. 「あった」を選んだ方、具体的にどんなことだったか教えてください。
7. 次回オンラインクラスのボランティアとして参加するなら、コースの中で何回ぐらい参加したいですか。
8. 次回対面クラスのボランティアとして参加するなら、コースの中で何回ぐらい参加したいですか。(新座キャンパス実施予定)
9. 授業ボランティアについて、何かありましたら、自由にお書きください。

質問事項の1は、1から5のスケールでの回答を得た。結果は表6の通りである。

質問1は「4よい」、または「5とてもよい」と評価した者が合わせて、夏期1回目では14名中13名、夏期2回目では15名中14名で、ボランティアに参加したことを高く評価していることがわかる。

表6 学生ボランティアのアンケート結果(質問1)

1～5(とてもよい)	夏期1回目					夏期2回目				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
1. 授業ボランティアとして参加してよかったと思いますか。	0	1	0	4	9	0	1	0	8	6

質問2では、参加してよかった理由を記述してもらった。夏期1回目、夏期2回目を合わせてみることにする。その中の主な理由は「短プロ参加者との交流」ができたこと、「日本語教育についての学び」があったこと、「英語の学び」があったことである。資料2にその例を示す。

資料2 質問2 参加してよかった理由

「短プロ参加者との交流」

- ・日本語を勉強したての学生と関わることができたから。日本語を通じて、海外の学生と関わることができ、楽しかったから。(夏期1)
- ・日本語を教えることの難しさを感じたのと同時にどのような工夫が必要なのかを学ぶことができたから。また、ただ日本語を教えるだけでなく、参加者とのコミュニケーションを取ることで知らなかった文化を知ることができたから。(夏期1)
- ・日本にいながら、日本語や日本に興味を持っている人たちと交流し少しではあるもののそのサポートをできたから。(夏期2)
- ・留学生の方の発表のサポートをする中で、それぞれの国の魅力などを知ることができ、文化交流としてもとても貴重な経験となったため。(夏期2)

「日本語教育についての学び」

- ・日本語学習者の方々の役に立てたと感じることができたから。自分の話している日本語がどれだけ分かりやすいか、或いは理解しづらいかを認識することができ、自分自身も正しい日本語を話せるようになりたいと思えたから。(夏期1)
- ・自分が話す母国語の特徴を学びなおすことができたのと、学習者にとってどのような日本語の規則や発音が難しいのかを知ることができ、今後実際に教える立場になった際に参考になると思ったため。(夏期1)
- ・日本語教授法等の授業で得た知識を実際に活用することができた。実際に同年代の日本語学習者とかかわることで、彼らの成長を感じることができ、とても有意義だなと思った。(夏期2)

「英語の学び」

- ・英語を使って日本語を説明するという貴重な経験ができたから。(夏期1)
- ・海外にいる学生と交流する機会はあまりないから。また、外国語を使ってコミュニケーションを取ることで、自分のレベルを試すこともできたから。(夏期2)
- ・日本語学習の手助けができたから。自分の英語力、日本語の語彙力を知ることができたから。(夏期2)

質問3では、授業ボランティアで期待していたことを記述してもらった。その中の主な理由も質問1と同様「短プロ参加者との交流」、「日本語教育についての学び」、「英語の学び」である。資料3にその例を示す。この学生ボランティアに参加した者のうち、異文化コミュニケーション学部の「日本語教授法A」という授業を受講している者の多くは、日本語教育についての学びを期待していたようである。

資料3 授業ボランティアで期待していたこと

「短プロ参加者との交流」

- ・日本語学習者の方々とたくさん交流して会話を楽しみたい。(夏期1)
- ・留学生と日本語を使った会話や、それぞれの文化についての紹介など。(夏期2)

「日本語教育についての学び」

- ・実際に日本語学習者と接することで、日本語教育を実践的に体験することを期待して参加した。(夏期1)
- ・海外で日本語を学んでいる人は、なぜ学んでいるのかを知ること。また、日本語を学んでいる中でどのようなことを難しいと感じているのかを知ること。(夏期1)
- ・日本語を学ぶ学生のみなさんと積極的にコミュニケーションを取り、日本語を学ぶ際に難しいと感じている点などについて支援していきたいとおもい、参加しました。(夏期2)

「英語の学び」

- ・海外留学生との交流と、英語を実際に話すことで自分の英語のスキルアップ(夏期1)
- ・英語でコミュニケーションすること(夏期2)

資料3のような期待を寄せて参加した結果どうだったかを尋ねたのが質問4である。期待していたことが達成できたかどうかを1～5のスケールで回答してもらった。その結果が表7である。

表7 学生ボランティアのアンケート結果（質問4）

1～5（とてもよい）	夏期1回目					夏期2回目				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
4. 期待していたことが達成できましたか。	0	1	2	2	9	0	0	2	5	8

また質問4は「4よい」、または「5とてもよい」と評価した者が合わせて、夏期1回目では14名中11名、夏期2回目では15名中13名で、ボランティアの参加で期待していたことが達成できたという学生が多かったようである。

質問5は、期待していたこと以外に、気づいたり学んだりできたことがあったかを尋ねたが、「はい」と回答した者が夏期1回目では14名中13名、夏期2回目では15名中11名であった。

質問6では、期待していたこと以外に、気づいたり学んだりできたことがあったことの詳細をあげてもらった。資料4にその具体例を示す。質問6も質問1、質問3と同様、「短プロ参加者との交流」、「日本語教育についての学び」、「英語の学び」を挙げている。質問6では、質問1や3と異なり、「短プロ参加者との交流」によって得られた経験について記述するものが複数見られた。

資料4 期待していたこと以外に、気づいたり学んだりできたことの詳細例

<p>「短プロ参加者との交流」</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本語を学びたいと思う学習者が世界各国にいることに気付かされた。私が参加したクラスの学習者は、ギリシャやカリブ海にあるトリニダード・トバゴ、そして北極圏に近いカナダ領のキャメロン島出身で、その場所からZoomに参加していた。とても多くの方が日本語に興味をもち勉強しているのだと思った。（夏期1） 留学はできないけれど、日本語を一生懸命学んでいる学生が多くいてうれしく思いました。ブレイクアウトルームでなぜ日本語を学んでいるのか、と聞いたときにアニメが好きだから、という理由を聞いて、言語学習にはポップカルチャーを含む文化が大きな影響を与えていることを実感しました。また、学習する内容が料理という身近なトピックで、自国の料理も紹介することができるテーマだったので、とても学習しやすいいろいろなアクティビティをしやすいトピックだと感じました。（夏期2） <p>「日本語教育についての学び」</p> <ul style="list-style-type: none"> 普段友人と話す言葉ではあまり通じなく、日本語を丁寧に話す必要があった点。（夏期1） 私自身も様々な語学を学んでいるのですが、大半の方が日本語を楽しんでいる様子で、とても嬉しく思いました。そのため、教えてる私も期待以上に楽しく共に日本語の学びを深めることができました。（夏期2） <p>「英語の学び」</p> <ul style="list-style-type: none"> （略）、自分の語学力、語彙力のレベルを認識することができた。（夏期2） 日本語は話せなくても英語で皆会話ができていて、英語が話せるのは基本だということを知ることができた。（夏期2）

質問1から質問6の結果から、学生ボランティアとして参加した者は、「短プロ参加者との交流」、「日本語教育についての学び」、「英語の学び」を期待して臨み、その期待通りの結果が得られた

と言える。特に参加前は「日本語教育についての学び」を期待していたが、参加後はそれに加えて、「短プロ参加者の交流」を通して異文化を学ぶことになったようである。コロナ禍においては、本学の学生も海外留学が困難であり、海外の学生との交流が自由に行えない状況にあると言える。このような状況での短プロへの参加は、海外の魅力に触れたり、語学学習や専門科目につながる気づきを得たり、自身とは異なる背景を持つ人の存在を知るきっかけとなり得ることが分かった。さらに、質問7、8では今後のボランティアとしての参加の希望について尋ねている。

表8 学生ボランティアのアンケート結果（質問7、8）

回数	質問7 オンラインでの参加					質問8 対面での参加 (新座キャンパス)				
	0回	1回	2回	3回	4回以上	0回	1回	2回	3回	4回以上
夏期1回目(14名)	0	2	5	3	4	4	2	2	3	3
夏期2回目(15名)	1	2	3	3	6	6	4	2	1	2

表8からわかる通り、対面での参加より、オンラインでの参加を求める学生が多いことがわかる。対面の場合、池袋キャンパスではなく新座キャンパスで行われるため、キャンパス間の移動が難しいため、敬遠されたのかもしれない。しかしながら、4回以上を希望する者が夏期1回目にも夏期2回目にもおり、学生ボランティアとしての参加に強い関心を持っていることがうかがえる。したがって、今後もオンラインプログラムの場合、学生ボランティアの募集をすれば多くの学生の協力が得られる可能性がある。

最後に、質問9で授業ボランティアについて自由に記述してもらったが、その中で「ボランティア参加の経験から得た学び」について述べたものと、「教師へのフィードバック」に関するものを資料5に示す。

資料5 授業ボランティアに関する自由記述

「ボランティア参加の経験から得た学び」

- ・実際に同じ大学生である学習者の方と接することで、言語に対する彼らの姿勢から私自身も学びを深めることができ、とても良い経験となりました。(夏期1)
- ・今回のプログラムに参加し、同じ年代の日本語学習者の方々と接することで、自分自身の語学学習の意識改革にも繋がりました。やはり、楽しんで学ぶということは、語学だけに限らず学びの中でモチベーションを向上させる上でも重要なことだと感じます。また、学習者の方々の発表の準備段階からサポートすることで、最終発表の際にそれぞれの大きな成長に気づかされ、感慨深いものでした。次回のプログラムもぜひ参加したいと思っております。どうぞよろしく願いいたします！(夏期2)
- ・常に笑顔で、学習者が間違っても間違いを指摘するのではなく、正しいことを自分が実践して手本を見せることが、学習者にとって日本語を心地よく学べる環境だと思った。とにかく楽しかったです。(夏期1)

「教師へのフィードバック」

- ・授業が始まる前などに少し、ボランティアのオリエンテーションのような時間があると、授業で何をすれば良いか、気をつけることなどを共有できるので、よりスムーズに授業が進むのでは無いかなと思う。
- ・事前に授業内で扱うページを把握できていたら、事前準備ができたと思う。

「ボランティア参加の経験から得た学び」に書かれている、「言語に対する彼らの姿勢から私自身も学びを深めることができた」「自分自身の語学学習の意識改革にも繋がる」「正しいことを自分が実践して手本を見せることが、学習者にとって日本語を心地よく学べる環境」などの記述は、日本語クラスの運営、日本語学習者について理解を深めること以上に、学習とは何か、語学学習とはどのようなものかといったことについて能動的に考えを深める非常に有意義な経験となったことを物語っている。このような海外の学生とのつながりから、新しい考え方や価値観が生まれ ていくのではないかなと思われる。

また「教師へのフィードバック」からは、事前の詳細な案内が必要なのことがわかった。学生ボランティアには事前に e-book 版のテキストのダウンロード方法やテキストのページ数が書かれたスケジュールをメールで送っているが、紙面だけでは理解できないこともあると思われる。今後は参加者に対して、より具体的に明確な指示を出すよといことが示唆された。

6. おわりに

本稿では、2021 年度夏期に初めて実施したオンラインによる短期日本語プログラムの授業実践を報告した。短プロのオンライン展開にあたっては、毎回の授業担当者からの授業報告を見ると、授業運営をしていく上で大きな混乱はなく、2020 年度春学期より開始していた CJLE 展開科目のオンライン授業での経験が活かされていたと思われる。

コースデザインをする上で、短プロの掲げる目標が達成できるように、さまざまな取り組みをしてきたが、その中でも学生ボランティアとの活動は、短プロ参加者、本学の学生の双方が学び合える貴重な場となっており、オンライン版短プロにおいても、短プロの目標達成に大きく貢献する展望があることが見えてきた。1月に実施する冬期のオンライン短プロにおいても、学生ボランティアの参加が予定されており、初めてオンラインで実施する日本文化社会講義においても、本学の学生が参加する予定である。今後も短プロに参加した学生ボランティアへの事後アンケートを継続し、次はプログラム評価の視点から短プロが大学の国際化にどのように貢献をしているかを見ていきたい。

注

- 1) Rikkyo University Short-Term Intensive Japanese Program (Rikkyo SIJP)

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/english/sijp>

- 2) 2019年度の本学の授業時間100分化に伴い、短プロは50分1コマとした。2018年度までは、大学授業が1コマ90分であったため、短プロは①45分×56回、②45分×30回で実施していた。

<https://www.rikkyo.ac.jp/news/2018/06/mknpps000000jg4q.html>

- 3) 短プロの授業は、1コマ50分で展開しているが、学生ボランティアの募集は、大学授業コマと同じ100分（短プロ授業2コマ分）を1枠として募集している。

参考文献

- 藤田恵・数野恵理・金庭久美子・任ジェヒ・小林友美・小松満帆・池田伸子・丸山千歌（2021）「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応——2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み——」『日本語・日本語教育』第4号、1-20.
- 藤田恵・金庭久美子・丸山千歌（2020）「短期日本語プログラムの授業実践と展望——『成果発表』の指導における課題と改善への取り組み——」『日本語・日本語教育』第3号、99-109.
- 立教大学日本語教育センター（2018）『シリーズ 新しい日本語教育を考える7 短期日本語プログラムは大学の国際化にどのように生かせるか』.